

今日のシライ中

本の翼

白井中学校図書室から VOL.25

今日は、先日行われた「学習発表会」の「弁論の部」で活用されていた「本」について、紹介します。弁論を聞き、読書の面白さ、環境問題への提言、言葉の楽しさ、を知り、たくさんのコメントを寄せてくださった皆さん！さあ、今がチャンスです！「鉄は熱いうちに打て」です。手に取ってみてはいかがですか？

『車輪の下』 ヘルマン・ヘッセ

1年生の国語の教科書にずっと昔から掲載されている（70年ほど前から！）「少年の日の思い出」。もちろん、この作品も有名ですが、（ちなみに、この作品には、「日本」と「ヘッセ」を結ぶ数奇な運命があります。知りたい人は、国語科の先生まで！）本作は、ヘッセの代表作として、今でもよく読まれている作品です。小さな村に生まれた「ハンス」。幼い頃から、「神童」ともてはやされ、村の期待を一身に背負い、「神学校」へ進学します。（「神学校」は、その当時、最高のエリートのみが進学できる学校でした。）しかし、そこで「ハンス」を待っていたものは……。弁論でも紹介されましたが、ヘッセの描く、「光と闇」が哀しい調べを伴って交差する作品です。



『世界がもし100人の村だったら』 池田 香代子・C.ダグラス・ラミス

この作品は、というより、この作品群はといったほうがよいほど、たくさんの広がりをもつ興味深い作品です。ことの発端は、今から30年程前、アメリカの大学の一人の先生が著したものです。それが、インターネット上で様々なバリエーションをもつものとして、広がり、現在に至ります。ですから、「1冊の～」ではなく、「様々な」本作が存在します。たとえば、「世界がもし100人の村だったら お金編」。には、「世界がもし100人の村だったら1人のお金持ちの富と99人の富は大体同じです。」とあります。さあ、どうしてそんなことになってしまったんだろう？次々と投げかけられる視点は、私たちの「日常」「当たり前だと思っていたこと」を考える上での、新たな指針となるはずです。

『「40～」「80～」から始まる本』

1年生のとき、図書館の利用指導・オリエンテーションで扱った「日本十進分類表」通称「NDC」、覚えていますか？そうです。「NDC」は、たくさんある書籍のいわば、「住所」です。「本」の背表紙のラベル、上段に示されている数字です。さて、弁論で活用された「オランウータン」等の「動物」の話題は、「40」から始まる「自然科学」の中にあります。また、「方言」は、「80」から始まる「言語」の中に含まれます。昨今は、本屋さんに行くのもなかなかためられる状況で、ついつい、インターネットで本を注文しがちですが、お目当ての本の隣にある、風変わりな一冊に目を留める。こんな風に図書室を利用してもらえると、思いがけない「本」との出会いが待っているかもしれません。たまには、寄り道・迷い道も楽しいものですよ。

